

江森康文先生を偲んで

千葉大学大学院融合科学研究科 矢口 博久



江森康文先生（千葉大学名誉教授）が2012年1月16日に逝去されました。享年86歳でした。江森先生は日本視覚学会の前身（視覚研究会）の前身である生理光学研究会の発起人の一人でした。当時を知っている方は、夏、冬の合宿形式の研究会で、江森先生をはじめ大頭仁先生（当時早稲田大）、故秋田宗平先生（当時京都工繊大）、池田光男先生（当時東工大）が学生の発表に対して厳しくもユーモアあふれる質問を浴びせていたのを懐かしく覚えているかと思います。

江森先生は東京帝国大学第一工学部計測工学科を昭和23年3月に卒業され、東京大学助手、防衛技研光学研究室長、茨城大学を経て昭和41年に千葉大学に赴任されました。千葉大学停年後は、東京情報大学、十文字学園女子大学で教鞭を取られまして、平成9年からは悠々自適の生活に入っておりました。千葉大学での研究領域は視覚光学からはじまって、画像計測、色彩計測、レーザー計測、リモートセンシングと一貫して広い意味での計測工学をカバーするものでした。私は卒業研究と修士研究の3年間、当時の千葉大学工学部付属天然色工学研究施設江森研究室でお世話になりました。江森先生から、当時話題になっていたホログラフィーを記録する感光材料（写真乾板）の、空間的解像度、回折効率などの光学特性の測定のテーマを与えられ、日夜、その測定機器作りをやっておりました。ホログラムの回折格子にレーザー2光束の干渉縞を投影し、そのビート周波数をサンプリングして、ホログラムのMTFを計測するものでした。その研究の合間には、角膜の表面と裏面の反射による干渉縞から角膜の厚さを2次的に測定することなどもやりました。この頃の光計測、光学系の作成の経験は後の私の視覚の研究に多に役立ちました。また、当時は視覚光学、色彩工学に関する日本語の書籍は数少なく、江森先生が編集に加わった2つの書籍は大変参考になりました。一つは応用物理学会光学懇話会（現日本光学会）のサマーセミナーのテキストがもとになった「生理光学」（朝倉書店、1975）、もう一つは千葉大学の教養部の総合科目「色」の講義内容を本にまとめた「色 その科学と文化」（朝倉書店、1979）であります。今でも、これらの本を開くことがあります。その度に江森先生が思い出されます。

江森先生の視覚工学と計測工学の捉え方には2つの側面があったと思います。一つは、東京大学での博士学位論文「視覚系のMTFの測定」に代表されるように、視覚の機能を計測すること。もう一つは視覚を計測機器として捉えることです。前者の研究は眼光学学会を中心にした研究活動に見



瑞宝中綬章叙勲のお祝いの会にて（2004年11月）

られ、眼底画像の立体計測、角膜や水晶体の三次元画像観察装置の開発、生体眼の物理的計測装置の開発、白内障の視力シミュレーションの研究があります。後者の研究は、視覚をカラーセンサとして捉えた色彩計測の研究、視覚特性を取り入れた画像評価の研究、さらにはその技術をリモートセンシングにまで拡張した分光計測、画像解析、テクスチャ解析等、多方面に応用の分野を広げておりました。

私が学生の頃の江森先生の記憶は、机に向かって本を読んでいる姿、何処かから払い下げたか頂いたものか分からない、学生にはガラクタにしか見えないもの（江森先生には宝物だったのでしょ）で何かを作っている姿、そして年末恒例の江森研すき焼きパーティで浅草の肉屋で買ってきた高級とは思えない牛肉を学生に振る舞っている楽しそうな姿です。本当に、学生思いの先生でした。言葉では言い表せないほど、お世話になりました。

江森先生のご冥福をお祈りします。